

【一般の部受賞作】

日の沈む聖地・出雲と二重筒の巡礼

—八岐大蛇退治は現実か非現実か—

酒谷美知子

論文要旨

本稿では文芸作品を通して特定地域（島根半島）への理解を深め、文学研究が災害と観光に関して社会還元を果たすことを目指す。2024年7月、島根県出雲市大社町にて土砂崩れが発生し、日御碕地区と市街地をつなぐ唯一の県道29号が崩落し、主要産業である観光業が打撃を受けた。復興をすすめ、島根県は2026年度の県道の完成を目指している。出雲平野を流れる一級河川・斐伊川は八岐大蛇退治の舞台として知られる。

日御碕地区と稲佐の浜を中心に、島根半島の近現代文学作品に組み込まれた要素を読解した。観光地としての見方がそのまま映画や小説に盛り込まれており、観光客からの聖地出雲への視座と一致していた。日御碕地区に関する作品について中村隆資『出雲願開舟縁起』（講談社、2005年）は実話を基に高知県から出発した出雲願開舟が島根県出雲市の稲佐の浜に辿りつくまでのみちのりを描いている。作中では宇龍港から上陸した3人の男が日御碕地区の山道を夜に通り、稲佐の浜まで願開舟を届けた。日御碕神社はウミネコが海草を運んだ和布刈（めかり）神事にちなみ、わかめが特産品であり、ツーリングの名所として知られている。小説・塩野米松『天から石が』（集英社、1998年）では鳥海山からのツーリングの道中に夜を守る日御碕神社が登場する。

かつて出雲大社の門前町である神門通りは車社会の到来によって賑わいを失った。平成の大遷宮を契機に、大国主命が戻って来る前に工事を完了させることを目標に島根県・設計事務所・哲学者らが協力して古代の参道を再現し、歩車共存道路を完成させた。島根半島を巡る表象や物語は街づくりや観光に必要とされ、日本の田舎の表象の一部として作品に組み込まれてきた。閑散とする観光地であるが日御碕地区は夜を守る日御碕神社・日御碕灯台・ツーリングの要素を組み込んだ作品がある。県道の完成を目指す新たなストーリーが必要とされたとき、文学研究は復興を支援できる可能性を秘めている。